

短歌「一般の部」

堀井 文博・文化協会文芸部会 選

優 秀 賞

春夕べ「朧月夜」を口ずさみ母の歌声遥かに聴こゆ

渡邊 元司

「選者の寸評」

春の夕暮れ時、ふと「菜の花畑に入日薄れ・・・」と口ずさんだところ、幼いころの母の歌声が遠くから聞こえてきたのでしょうか。原っぱで遊んで迎えに来た母と一緒に帰るとき、歌ってくれたのかもしれませんが。母への想いを静かにていねいに詠っています。

思い出は夫との散歩黒色の運動靴は泥つきしまま

河合 佳代

「選者の寸評」

下駄箱のかたづけでもしたのでしょうか、あるいはお目当ての靴を探していた時、目に入ったのでしょうか。泥の付いた黒い運動靴が、雨上がりの朝夫と一緒にいった散歩を思いださせました。たぶんいつもの様に池の周りを他愛ない話をしながら……。さて、ひとしきり泥つきの運動靴を抱きしめた作者ですが、その後運動靴の泥はどうなりましたでしょうか。

頼りなく風にたゆたふねじばな振花の蕾を見ればお下げ三つ編み

佐藤 昇

「選者の寸評」

振花は芝生や公園などに自生する多年草の植物で、小さなピンクの花をらせん状に咲かせます。花はもちろんねじれていてかわいいのですが、作者はその「ツボミ」に注目します。まだねじれがはっきりしない蕾はまさしく三つ編み、作者が幼少のころあこがれたけど、手が届かなかった「お下げの三つ編み」なのでした。